

# チャペル週報

人の子は仕えられるためではなく仕えるために、  
また、多くの人の身代金として  
自分の命を献げるために来たのである。

(マルコによる福音書10:45)



春季宗教運動特集号  
2011.5.16~5.20 No.5  
関西学院宗教センター

---

## ☆チャペル・スケジュール☆

---

時間 10:35～11:05 場所 各学部チャペル

---

5月16日(月) 神 水野 隆一(神学部教授)  
経 経済と人間⑧ 藤井 英次(経済学部教授)  
人 いのちについて考える④ 川島 恵美(人間福祉学部准教授)  
聖和 聖書物語「ゆるしの王子」

---

5月17日(火) 大学合同チャペル 10:20～11:20  
西宮上ヶ原キャンパス 会場:中央講堂  
井上 琢智(学長)「変わらないもの、変わるもの」  
西宮聖和キャンパス 会場:メアリー・イザベラ・ランバスチャペル  
Ruth M. Grubel(院長)「世界市民」の最後の旅  
神戸三田キャンパス 会場:VI号館101号教室  
松木 真一(宗教主事)「深い淵より―神戸三田キャンパスの学生のために」

---

5月18日(水) 大学合同チャペル 10:20～11:20  
西宮上ヶ原キャンパス 会場:中央講堂  
Ruth M. Grubel(院長)「世界市民」の最後の旅  
西宮聖和キャンパス 会場:メアリー・イザベラ・ランバスチャペル  
平林 孝裕(大学宗教主事)「ランバスのたいまつ」  
神戸三田キャンパス 会場:VI号館101号教室  
井上 琢智(学長)「変わらないもの、変わるもの」

---

5月19日(木) 神 神学部有志 「救い主が来る」  
文 音楽チャペル・混声合唱団エゴラド  
社 東日本大震災の被災地を覚えて―Heart on Coin“絆”プロジェクト活動報告―  
法 音楽チャペル バロックアンサンブル  
経 経済と人間⑨ 高林 喜久生(経済学部教授)  
商 海外での奉仕を考える 上ヶ原ハピタット  
国 English Chapel Eun Ja Lee(宣教師)  
聖和 手話部たんぼぼ「気持ちを伝えるということ」  
総 吉野 太郎(総合政策学部専任講師)

---

5月20日(金) 院 森田 雅也(文学部教授)  
神 <震災を覚えて> 家山 華子(M2)「被災地におられる神」  
文 English Chapel Paul Dyck(文学部客員教員)  
経 経済と人間⑩ 前田 高志(経済学部教授)  
人 活動報告 上ヶ原ハピタット  
聖和 田淵 結(教育学部宗教主事)  
理 「思いわずらうな!」 松木 真一(宗教主事)

---

◇ランバス早天祈祷会 毎金曜日 午前8:20～8:40 於:ランバス記念礼拝堂(上ヶ原)  
5月17日(火)宗教運動のために 森田 雅也  
5月20日(金)人間福祉学部のために 杉野 昭博

---

# 「変わらないもの」と「変わるもの」

井 上 琢 智

明治憲法が発布された1889年に創設された関西学院は「憲法」を制定し、第2款で「本学院ノ目的ハ…基督教ノ主義ニ拠リテ日本青年ニ知徳兼備ノ教育ヲ授クルニアリ」と定めそれが建学の精神とされました。原典では“The object of this Institution is … the intellectual and religious culture of Japanese youth in accordance with the Principles of Christianity”となっています。注目したい一つは「主義」と訳された原語が“ism”の訳ではなく、明治期の訳語の通例として“principles”つまり「原理」の訳語として、それも単数ではなく複数であるということです。ここに関西学院の“culture”の基礎としてのキリスト教の原理に多様性さらには寛容“toleration”、“magnanimity”を読みとることが出来るのではないのでしょうか。だからこそ、関西学院にとっては121年を経過した今なお「変わらないもの」として守り続けられているのです。

それに対してスクール・モットーは、時代背景だけでなく関西学院の歴史段階によって「変わるもの」なのです。というのは、「キリスト教主義教育」が建学の精神であるのに対して、スクール・モットーは関西学院に関わる人びとの行動指針ともいうべきものだからです。関西学院が創立された初期にあって第二代院長の吉岡美園が好んで揮毫した「敬神愛人」が、また普通学部では、「公明正大」という標語がその役割を果たしていました。「敬神愛人」は「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（マタイによる福音書22-37）や「隣人を自分のように愛しなさい」（同福音書22-39）といった戒めを要約したものとされています。同窓永井柳太郎が揮毫した書で知られる「公明正大」（藤田東湖「正気の歌」）は「生徒等は、全然監督者無くして受験するの慣ひなりしも彼等は相戒めて、俯仰天地に恥じざらん事を期したりき」という生徒の日常の行動規範を示したものでした。

現在のスクール・モットーはもちろん“Mastery for Service”です。これはC.J.L.ベーツ第4代院長が新設の高等学部のために提唱し、その後『商光』創刊号（1915）の“Our College Motto”の中でその意味を提示しました。このモットーが上ヶ原移転を契機に同窓山田耕筈により作曲された校歌「空の翼」の歌詞に読み込まれたこともあり、しだいにオール関西学院のモットーとして受け入れられました。今、新たな邦訳が試みられています。

（学長）

# A “World Citizen’s” Final Journey

Ruth M. Grubel

As you may know, Kwansei Gakuin’s founder, Dr. Walter R. Lambuth, was born in Shanghai, several months after his young parents first arrived in China in 1854. But, did you know that he was also buried in Shanghai? I was reminded of this recently when we received a photo of Dr. Lambuth’s new grave covered with flowers in 1921. This means that it has now been 90 years since our founder and model “world citizen” took his last journey.

Dr. Lambuth was in Japan for a total of only 4 years. In 1891, he had to go to the United States, and although he had hoped to return to Japan soon, he was quickly recruited to serve in national leadership positions for the church, promoting the cause of missions around the world. During the next thirty years, he traveled to many different countries and began new programs in the fields of education, health, evangelism, disaster relief, and poverty reduction. As one friend said of him, “He had a passion for the world.”

His last trip is a good example of how tirelessly he worked to serve his brothers and sisters around the globe. Although he was suffering from a serious health problem, his doctors in America gave him permission to set off for Asia in the summer of 1921. From Shanghai, he went to Korea, and then to Northeast China and Siberia, visiting places like Harbin and Vladivostok where various humanitarian projects had been begun. Then, after returning to Korea for a few days, he went on to Japan, where the annual meeting of the church mission was being held at Karuizawa. He was able to lead the meeting for the first three days, but the pain from his illness became so intense that he was moved to Yokohama, and he had surgery at a hospital there. During the two weeks after

his surgery, he wrote more than 100 letters to contacts around the world, with the help of his good friend, W.E. Towson, who was by his side. Despite hopes of recovery, his condition suddenly worsened, and Dr. Lambuth passed away on September 26th.

Dr. Lambuth's parents also worked in Japan after moving there from China with their son. His father, James, is buried in Kobe, but his mother, Mary, who moved back to China shortly before she died, is buried in Shanghai. Dr. Lambuth's wish was to be buried next to his mother, and this is why his grave is in Shanghai. Although he has been gone now for 90 years, his love for others, and the work he began still lives on.

(院長)

---

## キリスト教主義に基づいて……

松 木 真 一

4月にスタートした新しい大学生活も早いもので、もう一か月半が過ぎました。新入生一人ひとりの心には、きっといろいろの思いが生じ始めていることでしょうし、またこれからの大学生活や勉学について様々な願望や計画も不安と期待のうちに抱き始めていることでしょう。そうした思いや願望と絡んで、この関西学院という学校はキリスト教主義であることも授業やチャペルアワーを通して、改めてあるいは新たに認識し始めているのではないのでしょうか。「宗教運動」の機会に、こうしたキリスト教主義や建学の精神に心を向け集注してみることは、特に新入生にとって大事な、大切なことだと思っています。

関西学院の理念や教育や活動など種々の営みについて語られる時、よく見かけるのは「キリスト教主義に基づいて・・・」といった文言です。一体、どういう意味でしょうか。

この意味について思いをめぐらす時、私は個人的ですがいつも思い出すことがあります。関西学院中学部で過ごした3年間、毎日体験した礼拝です。そこ

で繰り返し読まれて、いつの間にか心に深く刻み込まれた聖書の言葉があります。―「患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出す」（ローマ5：3-4）

もちろん中学部生の私には、単純に響きの良い美しい言葉、といった程度のものでした。しかし大きくなるにつれ、いろいろの出来事や人びとと出会い、自分も変化・成長して人生経験を積み重ねていくうちに、この言葉の持つ深い意味を徐々に自覚するようになったのです。「患難」はいつかきっと「希望」に変わるのだ、と。人生のいわば根本的指針のようなものです。

この宗教運動の時節、私はこの聖句に、関西学院が建学以来立脚してきたキリスト教主義の意味する重要な一面を強く実感せざるを得ません。新入生はもとより、すべての関学生、職員教員の、というよりそもそも人間の人生には順境と逆境があります。成功、恵み、喜び、幸せは人生を豊かにしてくれます。しかし逆に、それらすべてを一瞬に破壊し、人生を虚しくつらいものに変えてしまう「患難」に遭遇することもよくあります。まさかという形で。予想を超える形で。程度の差こそあれ、人生を妨害し深く傷つけ、あるいは否定するような逆境です。問題は、その時それをどのように受けとめ、どのように乗り越えていくか、ということ！

この聖句は、時間が経てばそのうち解決する、という意味ではありません。むしろ、現実遭遇する患難、そうした患難の現実そのものを受容し支える一層の「深み」（ティリッヒ）、患難や逆境のただ中に落ちた人間の存在をより深いところから受容し支える、そうした一層深い場を暗示・示唆しているような気がします。現実の外側に何か抽象的超越的なものを求めるのでありません。悲しみと苦悩、限界と絶望の真ただ中に在る人間のいわば内なる深みに、自らの立場と視座を求める宗教的な求めとも言うべきものです。そのような深い場から、改めて自分の人生を、また現実に経験する患難や苦悩をしっかりと受けとめつつ希望へ開かれていくようにと、同時にまた他者の人生と存在、特にその患難や苦悩を共に受けとめ支えあい、そこから希望に向かって共に前向きに進んでいく道を真剣に祈り求めることができるようにと強く願わざるを得ないのです。

今年の「宗教」運動がこうした宗教的な場に少しでも関心を深める機会となれば、と願っています。

（理工学部宗教主事）

## ランバスのたいまつ

平 林 孝 裕

最近、お気に入りのテレビドラマに「JIN－仁－」があります。村上もとかさんの漫画を原作に、幕末の江戸にタイムスリップした脳外科医である南方仁を主人公とした刺激的なストーリーが展開されています。主人公以外にもたいへん魅力的なキャラクターが多数登場しますが、第一作で登場した武田鉄矢さん演ずる緒方洪庵を皆さんは記憶されているでしょうか。

洪庵はすぐれた蘭方医でした。作家司馬遼太郎は、洪庵の人間と業績を憶えて美しい小文（「洪庵のたいまつ」）を記しています。この文章は小学校5年生の教科書に掲載するために書かれたのですが、司馬は洪庵について「かれは、名を求めず、利を求めなかった。／あふれるほどの実力がありながら、しかも他人のために生き続けた」とたたえ、その「生涯は…実に美しく思える」と評しました。彼が洪庵をさらに高く評価するのは、かれが教育を通じて「自分の恩師たちから引きついただいまつの火を」「弟子たちの一人一人に移し続けた」ところにあります。洪庵は大坂北浜に適塾を開き、その後の新しい日本をささえる幾多の人物を育てました。たとえば福沢諭吉、大村益次郎などは皆さんもその名を日本近代史で学んだにちがいありません。適塾はのちに大阪大学へと発展し、また適塾生であった福沢は慶應義塾の創立者になったことを、あわせて想起してもよいでしょう。洪庵から弟子たちに移されたたいまつのは、それぞれ分野であかあかとかがや」き、「日本の近代を照らす大きな明かりになった」ことに、私たちは感謝しなければならないと、司馬はこの小文を結んでいます。

司馬の文章に出会ったとき、洪庵と同じように《美しい生涯》をおくった人物を思い出さずにはいられませんでした。その人物は洪庵と同じように医師でしたが、かれの学校は大坂北浜ではなく、神戸原田の森に建てられました。かれが引きついただいまつの火は、自分の父ジェームズと母メアリーからのものですが、その火はウォルターからさらに新しい日本をささえる若者たちに移し続けられました。その明かりは今日、関西学院・関西学院大学の働きをとおして皆さんにまで引きつがれています。

建学の精神をおぼえるこの時、これまで、たいまつのはを絶やさず引きついで、人びとのため、社会のために尽くされた一人一人の働きに感謝するとともに、これを次へと移しともす使命を心新たにしたいと願うのです。

(大学宗教主事)

## ●ランバスチャペル・ヌーンコンサート

西宮上ヶ原キャンパスのランバス記念礼拝堂では、学生音楽団体による恒例のミニ・コンサートが開かれます。お昼休みのひととき、どうぞ耳を傾けてみてください。

- 5月19日(木) 関西学院グリークラブ
- 5月26日(木) 関西学院ハンドベルクワイア
- 5月31日(火) 関西学院交響楽団管楽アンサンブル
- 6月2日(木) 関西学院大学応援団総部吹奏楽部
- 6月7日(火) 関西学院聖歌隊
- 6月9日(木) 関西学院交響楽団弦楽アンサンブル
- 6月13日(月) 関西学院ゴスペルクワイアPower Of Voice
- 6月16日(木) 関西学院バロックアンサンブル

いずれも12時50分から13時20分まで、ランバス記念礼拝堂(上ヶ原)にて。

## ●チャペル・オルガニスト募集(理工学部生、総合政策学部生)

関西学院では毎年チャペル・オルガニストを募集しており、本年は5月28日(土)にオーディションを行います。採用されると個人レッスンを受けられることができ、チャペルの奏楽をはじめ、発表会、研修会、コンサートのことを通じて、教会音楽を中心とした幅広い知識、技能を身に付けることができます。

応募方法: 「募集要項」「応募用紙」を吉岡記念館事務室宗教センター、神戸三田キャンパス事務室(I号館キャンパス担当)で受け取り、オーディションの応募用紙を提出してください。また、電子メールの添付ファイルでも受付します。

☆「募集要項」「応募用紙」がダウンロードできます。

[http://www.kwansei.ac.jp/c\\_christian/index.html](http://www.kwansei.ac.jp/c_christian/index.html)

[学生団体の紹介](#)にあります。

応募期間: 5月6日(金)～5月26日(木)の事務室開室時間

お問い合わせ・資料請求: 吉岡記念館事務室宗教センター

電話: 0798-54-6018、 E-mail: organist@kwansei.ac.jp

## ●大阪梅田キャンパスチャペル

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローズタワー14階の大阪梅田キャンパスでは、授業期間中の毎週金曜日にチャペルアワーを開催しています。

(18:00～18:20 1405教室)

5月20日(金) 田淵 結 (教育学部宗教主事、宗教総主事)

5月27日(金) 樋口 進 (宗教センター宗教主事)

## ●関西学院会館の日曜礼拝

授業期間中の第二・第四日曜日に、教職員と学生有志による礼拝が行われます。一部英語を用いるバイリンガル形式です。どなたでも参加できますのでどうぞお越しください。

5月22日(日) 午前10時～11時

関西学院会館ベーツチャペル

## ●ランバスチャペルアワーのお知らせ

学部の枠を超えて集まった学生主体のチャペルがランバスチャペルアワーです。

テーマ: Mastery for Service との出会い

とき: 5月24日(火) 10:35～11:05

ところ: 西宮上ヶ原キャンパス ランバス記念礼拝堂

## ●CD・DVDライブラリー

吉岡記念館事務室宗教センターには、教会音楽、キリスト教に関するCDやDVDを備えています。本学学生及び教職員(学生証または身分証明書必要)であればどなたでも利用できますので、希望者は事務室までお越しください。